

地域からおこる「新しい協同組合」のうねり —飯島報告を聞いて

梶 慶 一 郎 (埼玉県/株第一経理)

協同総合研究所 '93年度第1回基本研究会

11月2日 於：明治大学

「地域からおこる「新しい協同組合」のうねり」

—働きがいと人間・生活の総合化を

保障する社会を—

報告者：飯島信吾 (シーアンドシー)



今年度の基本研究会の年間テーマは「新しい協同組合——その特質と発展方向」と題され、現在日本における「実践例」を掘り起こしていくことになっています。この場合の「新しい協同組合」という概念や、その協同運動は、「地域における新たな公共性の役割や、その組織に携わる人たちの働き方、管理、運営、生産、消費、生活のあり方を問い直す」ものとして、その意味を深めていくものとされています。

11月2日に報告された飯島氏の報告は、自ら足で歩いた取材を通して、3ヶ所の「地域に根ざし地域に起こる、新しい協同運動の実践例と、そこで働く人の「新しい人間の姿」を探っています。話された内容をレジメに従って記しますと、次のようになります。

I. 最近の取材のなかから

① 地域社会の内発的力を引き出した協同

——朝日新聞の福祉賞を受賞した「岩手県・遠野市」の場合

② 地域社会の潜在的欲求を引き出した協同

——小規模・多機能型「宅老所」。島根県・出雲市、無認可ホーム「ことぶき園」の場合

③ 仕事おこしのなかから公と私と協同を作り出した——伊丹事業団「ヘルパー協会」の場合

II. なぜ部分的

人間欲求ではだめなのか

① 労働問題の取材のなかから

(1)会社への思い (2)憎悪の哲学 (3)自己実現
——現在の「会社人間」「経営対労働の憎悪の哲学に基づいた抵抗と反対の関係」から、人間の全面発達による自己実現のあり方

② 生協、地域社会から

(1)他人労働 (2)女性の能力の発達とその後
(3)新しい協同組合への無自覚

——現在の生協労働者、あるいは生協組合員はともすると、労働が「受け身」で「部分的」で、また周りへの関心も、「現在の生協活動の範囲」にとどまって、「新しい協同組合へのテーマに対しては関心を持たず」としないうこと、など——

III. 仕事も人間・文化も地域も

① 全国津々浦々に生まれている生産者協同

② 地域の内発的欲求に依拠した生協・地域づくり

③ 労働者(生産)グループ

——働くこと、生活すること、地域とのかかわりは同時に関連するものであり、この観点から見た人間の「全面発達、全面労働」のあり方——「自分の仕事を通して、地域が見えて、世界が見える、——といったこと

以上が、話された内容でした。今年度の基本テーマを探り深めていく問題提起としては、事例といい、新しい協同運動のあり方の方向といい、大変示唆に富んでいました。

事例の中の伊丹事業団「ヘルパー協会」の場合は、日本労働新聞（前、じぎょうだん新聞）にしばしば報告されており、特にここでは内容を紹介します。事例の1番目の遠野市の場合は、朝日新聞の福祉賞を受賞したように、保健と医療と福祉が連携しあって「遠野方式の在宅ケア」「老人保健福祉計画づくり」として注目されているものです。

遠野市は、人口が3万人で、その内、65歳以上の人が19%を占めるといった高齢者の多い市です。ここでは計画も含めて8地区全部に「ふれあいホーム」を作る。各地区ごとに、民生委員（市全体で100人）を中心に、町内会、農協婦人部、PTA、保育園関係者がネットワークづくりをしながら、各地区では、福祉事務所、保健婦、ホームヘルパー（全市で30人）が一緒になってホームの運営をしている。又、財政上で支給される補助金や措置費を、縦型でばらばらで運用されていたものを全部一緒にして横型で運用するようにしたこと。「ふれあいホーム」を各地区に作ったことにより「老人のたまり場」になっていた病院から、「病人のための病院」になり、健康保険料の給付が減少したこと。又、民生委員中心のネットワークづくりは、老人一人一人全員の顔が見える町になっていること。こういうところで働いている人は、公務員感覚ではやれるものではなく（全体の奉仕者としての公務員労働のあり方の改革は、今後のテーマとなると思います——筆者）又、話をすると、世界で進んだ福祉の国のこともよく知っていること。30代40代がけん引車になって50代を引っばっていること。そのためには、「飲みネート」が大切なこと。などが報告されました。

遠野市では、91年9月からスタートし、市民参加の計画づくりを呼びかけ、「寝たきり老人ゼロ作戦」を目指して、「在宅寝たきり高齢者訪問診療、

を実施しています。この在宅ケアを支えているのが「高齢者サービス調整チーム」で、病院、保健所、市の職員、ヘルパー、社会福祉協議会からスタッフが来て月2回会議をしながら進めてるということです。こういう実行は、「市民のバックアップがないと成功しないもの、（遠野市の福祉係長談）であるわけで、新しい協同組合のテーマに適った実践例であると思いました。

医者主導型でなく、市民主導型の市ぐるみの老人保健福祉計画は、遠野市以外にもあるかも知れませんが、これだけ活発になっているところは、まだそう多くはないと思います。協同総研の全国研究集会を見学も兼ねて遠野市で開催することを提案したいと思います。

次に、出雲市の小規模・多機能型「宅老所」である「ことぶき園」ですが、園長さんは、特養老人ホームを退職して、6年前に開設しました。特養老人ホームというと、大規模で辺り隔離された所があるのが多いのですが、小規模で多機能で家庭でも地域でも支えられ、あまり規則づくめでない自由な老人施設という主旨で市街地の真ん中に開きました。入所者10人、デイケア11人のミニ老人ホームです。職員はパートも入れて8人、給料は社会福祉法人の給与規定に基づく。利用する人たちの費用は、デイケアは市からの補助があるので1日500円、入所者は国の措置費がないため1泊3食5000円ということです。建物は250㎡。建築費は1700万円。

街の中に身近にある「託老所」というのは大変魅力があります。筆者も、こういう規模で考えられるものならば1～2件の情報があります。企画、建築、運営についてセンター事業団の協力を得て検討をはじめたいと思います。

飯島氏の話は、新しい協同組合というもののあり方が、その運動や仕事を通して、人と地域の新たな結びつきや人間形成の新たな方向を指摘していることについて、この運動の発展方向に一層確信がもてるものを感じさせてくれました。